

する場合。

- ② 「中心文」を見きわめ、それをもとに要点をとらえる場合、「中心文」というコトバや何のもとに、「中心文」と決めるのか。
- ③ 具体的なことがらを強く意識して、要点へ関心がむかない。
- ④ 一文一文を分析的に読みとることがむずかしい。
- ⑤ 中心文をとらえても、それから余分なものをけずりとることがむずかしい。
- ⑥ 説明されていることがらをとらえない。ことがらとことがらのつながりに気をつけない。
- ⑦ まとめている文、例をあげている文、つけたしている文、理由をのべている文などと意識して読みすすめるが困難である。
- ⑧ 中心語句のとらえ方が容易でない。

以上のことに留意して、以下の研究をすすめた
いと考える。

2. 対 象

福島市内小学校 3年生

3. 指導の実際

(1) 教 材

「記号とことば」(3年下)

(2) 概 観

① 教材観

教材「記号とことば」は、「記号の意義」、
「記号の種類」および「ことばと比較した記
号の特色」について説明している文章であり、
11の形式段落から成っている。

〈第1段落〉

この段落は、学校のろう下で、図書室のあ
り場所を聞かれた場合どうするか、という具
体的な場面限定による書き出しになっている。
これは、とりつきやすさやわかりやすさを配
慮したものであろう。しかし、指示語がいく

つも出てきて文章をやや複雑にしている。

具体的な場面を書いているので、中心文を
選び出すことはむずかしい。「さしたり、言っ
たりして教える。」ことがわかればよいであろ
う。

〈第2段落〉

「けれども」ではじまるこの段落は、第1
段落の「さしたり、言ったり」に対するもの
として、「はり紙(やじるし)」をあげ、3の
文「つまり、このやじるしは、図書室へ行く
にはどう行けばいいかを表しています。」で記
号の抽象的な定義づけへの橋渡しをしている。
この3の文を、前との関連で十分読みとらせ
ることが、次の段落の抽象的な記号の定義の
読みとりを容易にするのではないかと思われ
る。

〈第3段落〉

1文1段落で、「記号の定義」を述べている
この段落は、第1段落、第2段落をまとめて
おり、いわば、意味段落における中心段落で
ある。

抽象的なことばでまとめているので、
「このように」という指示語に注意させて、
第1、第2段落と関係づけたり、「物事」の意
味を具体的にわからせたりして、この要点を
とらえさせる必要がある。

〈第4段落〉

「道路ひょうしきも記号の一つ」と頭括式
の書き方をして、次の第5段落の具体例につ
ないでいる。第4～第8段落は、記号の種類
について述べているのであるから、1の文が
要点文といえるが、2つの文の「形や色で意
味を表す」ことは、道路標識のみならず記号
全般の特徴の一つと考えられるのでふれてお
く必要がある。

〈第5段落〉

第4段落で述べている要点の具体例として
4種類の道路標識をあげている。4つの文の
文末表現(教えています→表しています→
意味です)の変化に目を向けておく必要が